

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	思い出と古浦敏生先生
Author(s)	近松, 明彦
Citation	プロピレア , 23 : 7 - 8
Issue Date	2017-08-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00044334
Right	Copyright (c) 2017 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



思い出と古浦敏生先生

近松 明彦

大阪学院大学外国語学部教授

平成 29 年（2017 年）の 5 月の連休のある日、古浦敏生先生の訃報に接し、驚き、本当に悲しく残念な気持ちになった。それから数か月が経過した今、先生に関係した様々なことを回想し、同時に自身がこれまでに経験した多くのことも改めて振り返っている。

今から 35 年近く前のことになるが、私が広島大学文学部に入学してすぐのあるとき、文学部の言語学研究室で先生方が私たち新入生と対面される最初の機会が設けられた。古浦先生とお目にかかったのはそのときがはじめてであった。柔和でいらっしやり、お話ししやすい先生という印象を受けた。

現在も同様なのかよく知らないのだが、当時の広島大学ではどの学部に入學したかに関係なく、1 年次生は全員が総合科学部で外国語科目や教養的な科目等を履修することになっていた。そのため、文学部で教えておられた古浦先生の授業に参加させて頂く機会は、私が 1 年次のときには一度もなく、先生にお目にかかるのは、ただ文学部言語学研究室の行事に参加するときに限られていた。例えば、新入生歓迎のコンパの折などに同席させて頂くことがあったかと思う。また、言語学の人たちと仏文の人たちの間で、ソフトボールの試合が毎年（年に 2 回ほど）開催されていた。そのような折など、先生とお話しさせて頂くことがあった。

2 年次に進むと、制度に基づいて総合科学部だけでなく文学部の授業も受けるようになった。イタリア語史を中心としたロマンス語学を特にご専門とされていた古浦先生は、広島大学では言語学の先生をなさっていて、言語の異なる講読的授業をいくつも担当しておられた。私が 2 年次であった年度、先生はロマンス語学の手引書をそのドイツ語版で読むという授業を担当され、私も受講生の 1 人としてその授業でお世話になることになった。また、私が 3 年次になった年度には、フランス語で書かれた言語学史の概説書を読む授業に参加させて頂いた。

一方、古典語の方面では、3年次のとき、古典ギリシア語で書かれたクセノポンの『アナバシス』の授業を受けさせて頂いた。また、ラテン語で書かれたウェルギリウスの『アエネイス』の授業を、大学院等の時期等、何年間か受講させて頂いた。しかし、古浦先生の本来のご専門であるイタリア語そのものに関しては、約半年だけ、初級の現代イタリア語を習ったのみであったと思う。これら、多くの授業のなかで、特に私の心に残ったのはウェルギリウスの『アエネイス』の授業であったという気がする。その作品の技巧的文体に目を見張った。先生は *hendiadys* という修辞技法（即ち、「二詞一意」と訳される技法）に何度も言及された。

あるとき、先生のイタリア留学の体験談をお聞きしたことがあった。先生は身のまわりの何気ない日常的なものであっても保存され、留学で経験された生活様式を具体的に説明するために用いられた。このときだけでなく、先生は興味を持たれたものを集めることを好まれた。先生は貴重な切手をととても多く集めておられた。また、書物も集めておられたと思う。学生時代、他の学生たちと共に、先生のご自宅にお邪魔したことがある。まず、広島市内郊外の坂道の上のご自宅にお邪魔した。そのあとしばらくして先生は東広島市方面（当時、広島大学は広島市内から東広島市への移転が進んでいた）に移られたが、そちらにも仲間の学生たちと一緒に邪魔した。新しいご自宅には立派な蔵書が備えられていた。

学生時代、古浦先生と何度もお話をさせて頂いて、穏やかに話される様子が印象に残るとともに、ものごとをととても綿密に考えておられるということが分かった。

古浦先生からフィロロジータ的なトレーニング等でお世話になることができたことは、現在も様々な形で私の生活と人生に大きな意味をもっている。言うまでもなく、テキストを正確に理解出来るようにすることは、人が言葉を使ううえで、したがって人が生きていくうえで、極めて大切な要素である。

最後になってしまいましたが、古浦敏生先生のご冥福をお祈り申し上げます。